

スマートフォンアプリによる月経痛に対する自己指圧の効果

Effectiveness of app-based self-acupressure for women with menstrual pain compared to usual care : a randomized pragmatic trial.

Blödt S et al

Am J Obstet Gynecol 218:227. e1-227. e9, 2018

背景 原発性月経困難症は、生殖年齢の女性の大多数において認められる。非ステロイド系消炎鎮痛剤 (NSAIDs) や低用量エストロゲンプロゲスチン製剤 (low dose estrogen progestin; LEP) は約2割に無効であり、根拠に基づいた治療が必要である。近年急増するスマートフォンアプリケーション (アプリ) は、自己管理の一助となる可能性がある。

目的 アプリによる自己指圧の月経痛への効果を、ドイツのベルリンにて調査した。

方法 本研究は2012年12月～2015年4月の期間で、前回月経時の疼痛強度 (numerical rating scale; NRS) が6以上の18～34歳の女性を対象に、月経6周期を調査した。

結果 対象の221人を、自己指圧群 (n=111) と通常

治療群 (n=110) の2群に無作為に割り付けた。平均年齢は24歳、月経3周期目の平均月経痛強度 (NRS) は、自己指圧群は通常治療群に比べ有意に低値であった (4.4 vs 5.0, $p=0.026$)。月経6周期目のNRSの2群間に有意差を認めた (-1.4 : 95%CI -2.0 to -0.8 , $p<0.001$)。月経3周期目と6周期目のNRSが50%以上減少した割合は、通常治療群で23%と24%であったのに対し、自己指圧群では37%と58%と、治療効果を認めた。

結論 アプリによる自己指圧は、通常治療と比べ月経痛を減少させることが示唆された。今後はほかの治療法との比較検討が望まれる。

(藤田医科大学産婦人科 坂部慶子 抄)

胎児と新生児の高度溶血性疾患に対する母体経静脈的免疫グロブリン投与による早期胎児輸血の遅延効果

Postponing early intrauterine transfusion with intravenous immunoglobulin treatment : the PETIT study on severe hemolytic disease of the fetus and newborn.

Zwiers C et al

Am J Obstet Gynecol 219:291. e1-291. e9, 2018

背景 妊娠20週までの胎児輸血は、胎児死亡率が高い。母体への経静脈的免疫グロブリン投与は、早期の胎児輸血への非侵襲的代替治療となる可能性がある。

目的 母体経静脈的免疫グロブリン投与が重度胎児貧血の発症を遅延させるかを検討した。

研究デザイン 12施設における後方視的コホート研究で、重度溶血性疾患既往の妊婦を対象に、経静脈的免疫グロブリン投与の有無で予後を検討した。

結果 対象は52人、免疫グロブリン投与群24例に対し非投与群28例であり、投与群では前回妊娠と比べ今回妊娠で胎児貧血出現が平均15日後であった。出現頻度は妊娠20週未満で20週以降より8%減少し、非投与

群では9日早く出現し、20週未満では20週以降より10%増加した。13週未満の投与開始例では、20週以降開始例と比べ胎児貧血出現は25日遅く、その頻度は前回妊娠と比べ31%低下した。新生児の交換輸血を要したのは、投与群で9%、非投与群で37%であった (OR 0.1, 95%CI 0-0.5, $p=0.009$)。

結論 胎児溶血性疾患のリスクのある母体への経静脈的免疫グロブリン投与は、胎児貧血の治療に有益な可能性があり、今後は多施設ランダム化比較試験による解析が望まれる。

(藤田医科大学産婦人科 坂部慶子 抄)